ＦＤ／ＳＤのビデオ教材の作成とその活用

小田隆治[1]，杉原真晃[1]，佐藤龍子[2]，田実潔[3]，大島武[4]，酒井俊典[1]
（1 山形大学，２静岡大学，３北星学園大学，４東京工芸大学）

はじめに

大学の発展のために，教員と職員の職能開発が強く求められるようになってきた。平成 20 年には大学設置基準が改正され FD（ファカルティ・ディベロプメント）が義務化された。職員も従来の業務に加えて企画・運営能力が求められるようになり，そうした能力を開発するための SD(スタッフ・ディベロプメント)が必要とされている。

FD がフォーカスを絞っている授業の改善に関しては，講演会型やワークショップ型の各種研修会が開催されている[1)]。また，授業改善のための教材としては様々な書籍が出版されている。一方で，企画・運営能力を開発するための SD はまだまだ模索中である。

山形大学の高等教育研究企画センターでは，平成 21 年度に動画によるビデオ教材を FD 版２本と SD 版１本を立て続けに作成した。本論では，それぞれのビデオ教材の内容と作成から公開にいたるまでの過程を概略し，それぞれのビデオの関連性について論じる。

1.　あっとおどろく大学授業 NG 集

我々が最初に作成したのがこのビデオ教材である。このビデオの特徴はタイトルにもあるように，授業で犯しがちな NG 事例を集めたところにある。

良い授業はパワーポイントどころか黒板がない時代からあった。ひたすら話すだけでも学生に感銘を与え能力を伸ばす授業は昔からあった。良い授業はバラエティに富んでいる。これこそが唯一無比の良い授業だということはない。一方で，教員の多くが授業の中で犯しがちな悪い事例を抽出することはそれほど難しいことではない。ところが，自分の研究室にこもって一人で悪い事例を見続けると，気分が落ち込んで改善する気力が萎えてしまうかもしれない。自分に心当たりがあってもどうして改善していいか思いつかなかったら，悶々としてしまうかもしれない。そんなビデオ教材は授業改善の役に立たないだろう。

我々はNG 集ということに合わせてそれぞれの事例にユーモアを被せることにした。ユーモアは紙媒体に入れた経験をすでに有している[2)]。こうして誰でもが楽しく見て授業改善に役立つものにすることにした。加えて，事例をかなり一般的なものに絞った。こうして次の 12 の事例に決定した。１．ダメ教師かな？，２．学生を見下し，３．身内自慢，４．放任教室，５．後部座席満席です，６．重ねがき，７．僕たちに怒っても…，８．一方通行，９．えこひいき，１０．情報の嵐，１１．教師の時間，１２．黙る人。

このNG 集は，１と９以外はホームページ上で週代わりに公開している。学会，研究会，FD 講演会などで機会あるごとに上映している。

このビデオを上映すると，聴衆は熱心に見入り，時々笑いが起こった。我々が狙いとしたユーモア感覚は立派に聴衆に届いていた。全編 20 分の作品であるが，子気味良いテンポで話が進んでいくので退屈せずに見られるという評価だった。

上映後は，自分が思い当たる NG 場面や，NG に該当する同僚の話で盛り上がることもしばしばある。そうした話し合いは決して暗く深刻なものにはならない。聴衆は明るく楽しく授業を振り返り，時として自分の対処法についても語りだす。

紙ベースの教材との違いを指摘する教員も多い。どのNG 事例も文章にすれば一行程度のものである。

あまりにも当たり前なので，琴線に引っかかることなく，すっと読み通してしまうものばかりである。しかし，映像にすると高々2 分程度の物語の中で自分に当てはまることが色々と頭に浮かんできて，自分の授業を省みることになるとの意見があった。この意見を表明した教員は，研究室で一人でホームページから流れてくる映像を見ているとのことだった。文章とは違った映像の効果があり，自分の授業を振り返るためにはかなり有効な作用を及ぼしているようだ。

以上のように，多人数を相手にした研修会，あるいは個人的に自由に見る場合，いずれのケースにおいても我々の作成した「あっとおどろく大学授業NG 集」は，授業改善のために有用な教材であるとの評価を得ている。

2.　学生主体型授業へのアプローチ

「あっとおどろく大学授業NG 集」を世に出すと，見た人たちからゼミナールや演習などの少人数教育用のビデオを作って欲しいとの要請があった。我々は当座そうしたビデオを作成するつもりはなかったが，平成 20 年に文部科学省の教育 GP に採択された山形大学の取組「学生主体型授業開発共有化 FD プロジェクト」の事業として冊子を作成することになっていたこともあり，SD 版のビデオを制作した余勢を駆って，一挙に学生主体型授業という少人数教育用のビデオを作成する運びとなった。メンバーは「あっとおどろく大学授業NG 集」と同じであり，再びこのメンバーでシナリオを書き，演技をすることになった。こうして出来上がったのが「学生主体型授業へのアプローチ」である。

このビデオはタイトルからも分かるように，前作とは違って単なる NG 集ではない。10 からなる事例はNG 場面と Good の場面から構成している。事例は次の通りである。1．グループに入れない学生がいる，2．グループの人数が多すぎる，3．オリエンテーションが大雑把，4．ディスカッションだけで，5．過干渉，6．グループの中に内職をしている学生がいる，7．時間配分の指示がないと，8．授業外学習をしない，9．攻撃的なコメントは，10．あっさりコメントでは。

本ビデオは学生主体型授業としつつも，グループ学習にフォーカスを当てて構成している。大学の教員の中にはグループ学習に馴染みのない人たちが多い。そうした状況にあって，NG 場面だけではその対処法を自分で考え出すことはできないだろうと我々は考え，NG を解消する対策をとった Good の場面をおいた。映像の中では前作と同様，詳しい解説の文章は入れなかったが，本作は DVD のカセットケースの中にそれぞれの事例についての解説文を入れた。

本作にはほとんどユーモア感覚がない。しかし，前作と同じように一つの事例を NG と Good 合わせて 2 分程度とし，テンポの良い作品に仕上げた。このテンポの良さが見る人を飽きさせないことにつながる。たしかに視聴者はあきることはないようである。

本作は，Good 場面を入れたことを高く評価されている。やはり分かりやすいというのだ。特にこれから学生主体型授業を始めようとする教員には参考になると高く評価されている。我々の制作意図も学生主体型授業の啓蒙にあるので，そうしたところでは目的を達成しているようである。

3.　あっとおどろく大学事務NG 集

これは前二者の大学教員を対象としたものとは違って，大学事務職員を対象とした SD 版のビデオ教材である。本作は「FD ネットワーク“つばさ”」主催による「大学間連携 SD 研修会」で制作したものである。北海道から九州までの全国の国公私立の 30 の大学・短大・高専の 40 人の事務職員が山形大学で，1 日で収録した SD の産物である。当日始めて会った職員がシナリオを書き，演技をしていった。

筆者の一人である小田は平成 15 年以降，山形大学で企画・運営・実施型のオリジナリティの高い SD を当時の学長の協力の下に実施してきた。この SD を大学間連携で実施することを考えてきたが，それが“つばさ”によって実現した。この大学間連携の SD の内容として事務版の NG 集のビデオの制作をぶつけた。

本作は次の 17 の事例からなる。１．学生との接し方，２．低い意識，３．えこひいき，４．整理整頓，５．前例踏襲主義，６．同僚の仕事を手伝わない，７．これって会議？，８．メモしよう，９．指示しない上司，１０．仕事の丸投げ，１１．空気の読めない上司，１２．ホウレンソウがない，１３．たらい回し，１４．メールで伝言，１５．鳴り続ける電話，１６．無言の電話，１７．頼まれる人。

本作はNG 事例からなる。ユーモア感覚も取り入れている。一つの事例が 1 分程度である。17 の事例は参加した旧帝国大学から小さな短大や高専の事務職員が一緒に考えたものである。それゆえ，どの大学でもおこっている一般的な事例である。

本作はホームページで公開している。また，このDVD の貸し出しを希望する大学は多い。我々はそれに応えることにしている。事務の仕事の見直しに使える教材として評価されている。

おわりに

ある大学の FD 講演会の中で「あっとおどろく大学事務 NG 集」を上映した。講演会終了後，参加した事務職員から「ビデオを上映している時に，教員たちから大きな笑いが起こった。その笑いを聞いたとき，是非とも FD 版のビデオも流して欲しいと思った。最後に流していただいてよかった」という意見をもらった。もちろんこの意見を述べた事務職員がビデオに出演しているわけではない。また，この大学の関係者や彼の知人が出演しているわけでもない。しかし，事務職員が教員から笑われたことに腹が立ったのだ。そこには同じ職種の人間としての連帯感がある。自分の仲間が笑われたようで腹が立ったのだ。おそらく事務職員が笑ったのならば腹が立たなかったはずである。

NG 集のような話は門外漢から見るとそれはただの面白い代物にしか過ぎないかもしれない。気をつけないと，製作者の意に反して，自分たちの職種を貶めるものに使われる危険性がある。用途は，FD 版は FD に，SD 版は SD だけに限定しないと無用な誤解を生む危険性を孕んでいる。

いずれにしても，我々が制作した FD／SD のビデオ教材は授業改善や仕事の見直しに役立つものであることは間違いない。これから，ポストアンケート等を通して定量的なデータを集め，より良い活用法を探求していく。

註

(1) 山形大学の FD 活動については，平成 11 年度以降，毎年発行している山形大学教養教育研究委員会（教育方法等改委員会）編，山形大学教養教育改善充実特別事業報告書『教養教育　授業改善の研究と実践』を参照のこと。

(2) 山形大学授業改善ハンドブック編集委員会(編) 2003 『あっとおどろく授業改善－山形大学実践編－』 山形大学教育方法等改善委員会.